

東大教授の年収は高い？ 安い？

豊澤 幸平

大学を卒業してから五十五年経過したが、今でも時々大学に顔を出している。教授はじめ先生方や現役の大学生と接すると、常日頃とは異なる感覚を味わい刺激を受ける。教授や大学生から就職の相談を受けることもあり、その際は出来るだけ丁寧に対応している。

ところで大学を取り巻く環境は、我々の時代と大きく様変わりしている事象も多い。その一つは大学の財政問題である。最近も東大の学費の値上げが話題になっていたが学費は当時より相当に上がっている。二〇〇四年に国立大学が法人化され国立大学法人となり、大学は財政面でも自立することを求められている。現在の八十六の国立大学法人の運営費は、国家の財政事情が厳しくなっていることから交付金が縮小され、大学側で相当程度の独自の収入を確保することが必要となっている。

昨春秋、日本経済新聞に「東大教授の年収は高い？ 安い？」というコラム記事が掲載されていた。記事では五十六歳の教授で報酬は約一〇〇万円と記載されている。私も卒業した大学やその他の関係者に聞くと、国立大学の教授で一〇〇〇〜二〇〇万円である。これを高いとみるか安いとみるかは人により異なるが、日経の記事では安いとの見解、私も同感である。

国立大学の教授は日本の最先端の研究者、教育者である。また天然資源や自給の食料が乏しい日本が生き残る道の一つは研究レベルを引き上げること、その為にも優れた人材を大学に集めることが必要と叫ばれて久しい。報酬だけでもないが報酬も大切である。比較が適切ではないかもしれないが、上場されている一般的な民間企業なら課長・部長と同じレベルである。欧米のトップクラスの大学教授の報酬は、約二〇万ドル（現行為替で三〇〇〇万円）であるから、世界から有能な教授陣を招くこともままならない。国会では教育の無償化が議論されている。財源の裏付け問題もあるとはいえ、育成する側の学校の先生や大学教授の報酬の検討も忘れるべきではない。

(二〇二五年一月)